



## 羅針盤

大原 國章  
Kuniaki Ohara

虎の門病院, Visual Dermatology 編集委員長



### 「色素性母斑のすべて①」執筆にあたって

本特集号は色素性の母斑の、主に臨床像について図示しています。いわゆるホクロ、黒あざです。青系の青色母斑、茶系の扁平母斑は次回に取り上げることになりました。正直なことを言えば、それらも含めて写真を揃え始めたら1号分では取まりきらなくなったので、分割せざるを得なくなったのです。今回は手術などの治療も供覧するつもりですが、1号分の枠内の範囲に留めます。

母斑細胞母斑というべきか、色素性母斑というのが正しいか、はたまたメラニン(メラノサイト)系母斑が適切か、あるいは色素細胞母斑という呼び名がよいのか、議論は尽きないでしょうが、そういった哲学論議や遺伝子研究は意図的に避けて、色素性母斑の多彩な臨床像と病理所見を自験例のなかから抽出しました。

メラノサイト、メラニンについての研究はとても盛んで、そのためか色素性母斑の分類や名称も覚えきれないくらい、枚挙にいとまがありません。その名称を覚えようとしても、実際の

臨床を抜きにしては“曇りの水練”ですし、専門医試験には役立っても実地の臨床にはあまり役立ちません。何か少しでも新しい所見、今まで論及されてこなかった所見があればすぐに名前をつけたがる、それは皮膚科医の悪い習性です。実態を知ってさえいれば、名称などはどうでもよいのです。

ということで、色素性母斑のさまざまな臨床類型を提示し、その病理的背景もお見せします。それと同時に、とくに解説は加えていませんが、経年的変化、病勢の推移—chronology—が窺えるような組み合わせ写真も用意しました。

本号と次回号で色素性母斑のほとんどは網羅し、図譜・アトラスとしても長く使っていただけのように編集したつもりです。しかし、紙数の都合で巨大母斑や Spitz 母斑、爪甲色素線条(次回)などは意を尽くしきれないくらいがあります。またの機会にあらためて書くつもりですので、本誌を継続・愛読していただきたく思います。